空の細道　その十九　　「アマゾナス州々都、マナウスのこと」

初めてマナウスの地を踏んだのはもう40年も前になる。現在は空軍基地だが当時は民間の定期便も使っていた。湿度の高い暑さの中、真っ暗な通りへ放り出されて心細かったのを思い出す。1964年の革命後、軍事政権下でフリーゾーンが動き出して間もなくの頃であった。当時、自分がこれほどに関わりを持つ土地になるとは想像もできなかった。
EさんJさんの見送りに感謝してブラジリアに別れを告げた。サンパウロから1000キロあまりの首都。そこからさらに北へ約二千キロ、海のようにしか見えない緑の絨毯の上を飛ぶこと2時間あまりでマナウスの空の玄関、エドゥワルド・ゴメス国際空港に着陸した。

マナウスはアマゾン川の河口から遡ること1500キロ余り。河口に近いパラ州のベレンまでは便船で100時間、まる4日はかかるアマゾンの中心地である。今年は雨季に雨が多く水位が記録的に高くなり、周辺の町では洪水の被害が出ていると言う。マナウスが面している川はベネゼラを源流とする褐色透明なコカコーラ色のリオ・ネグロ（黒い川）である。ペルーに源流を発する本流はソリモンエス川と言い白土色をしている。この二つの川がマナウス市の少し下流で合流、アマゾン川になるのである。褐色と白土色の二つの水面が何キロも平行して流れてゆく様は壮観である。
水温と流速の違いにより、褐色の水（22度C－2km/h）が白土色の水（20度C－4～6km/h）に乗り上げて混じらないために起きる現象で、エンコントロ・ダス・アグアス（水の遭遇点）として、アマゾン観光に欠かせぬ名所である。この辺りにはアマゾン固有のピンクのいるかも遊弋している。見られた人には幸運が訪れるそうだ。尻尾の水しぶきは何度も見えたが頭のほうは見損なった。

それにしても大河である。このあたりで川幅は8キロぐらいはあろうか。リオ・ネグロに橋がかかると聞いてまさか、と思ったが、すでに橋脚が何十本も姿を現しているのを目の当たりにした。増水ピーク時の橋の高さは55メートル。水深も優に60メートルありオーシャンライナーの航行に問題ない。来年には開通の運びになるそうだ。対岸のマナカプルやその他奥地の町とマナウスの時間的距離を短縮することにより、マナウスの過密を避け、奥地の開発を進めようと建設が始まった。エネルギー源の天然ガスのパイプライン建設もさらに奥地のコアリから平行して進めているという。市内に高層ビルが増え、道路が拡張され、立体交差が増え、二輪車、電気製品の工業集積地に発展したマナウス。交通渋滞も時間によって起きるようになった人口200万人の大都会。9年ぶりの訪問だが、その変貌振りにまた驚かされた。10年後のこの辺りはどうなっているのだろうか？工業化とエコツアー観光客の集中でアマゾンの大自然が、デズニーランド化してしまうのだろうか・・・

河港マナウスには浮き桟橋がある。川の水位の最高と最低には毎年平均して10メートル近い差があるからである。雨季の1月から6月までが増水期で、乾季の7月から12月までが減水期である。これまでの最高水位は1953年6月9日の29．69mだが、今年はまだ40cmほど少ない。6月に入って一旦止まった増水がまた始まったので、記録を更新するかもしれないと取りざたされている。この数字は、海面に対して何メートルかを示している。河口から遡ること千五百キロで、落差わずかに30メートルとは何とゆるやかな傾斜であることか。ちなみにマナウス市の最高地点で海抜92メートルだそうだ。急流が多い日本の川とアマゾン、育む気質に違いが出ても仕方が無い。

リオ・ネグロ川畔にホテル・トロピカルがある。74年ごろに完成したリゾート・ホテルである。当時は今の空軍基地から約20キロ、細く穴だらけの真っ暗な道をJMさんに車で送ってもらったものだ。今や空港から10キロ、立派な道路が走り、隣接するポンタ・ネグラは市民の憩いの浜辺として賑わう。コパカバーナ風に高級アパートも数棟建った。同じホテルの敷地内にトロピカル・ビジネスという二十数階建ての機能的なホテルが出来ていた。川に面したプールで、ひと泳ぎする。今は水面が高いので、川で泳いでいると錯覚する。九階の部屋に上がってシャワーを浴びた。実に心地よい。対岸のジャングルの影が濃くなった。雲間から覗く夕日が黒い水面にキラキラ浮いていた■